

〈患者を生きる:1856〉足にこぶ、手術したが



子育てと仕事で忙しかった30代のころ。足のだるさは、このころから始まっていた(大貫さん提供)

■血管の病気 下肢静脈瘤:1

豆腐工場で働いている茨城県常総市の大貫(おおぬき)ミサ子さん(64)は30年以上も、足のむくみやだるさに悩まされてきた。

32年前に夫を病気で亡くし、3人の子どもを養うため、朝から晩まで立ちっぱなしで働いてきた。帰宅すると、クタクタで足がだるくて動けなかった。

居間でうつぶせに寝て、体重の軽い三男に両足のふくらはぎを踏んでもらうと、いくぶん楽になった。ふくらはぎの真ん中は、黒ずんでいた。「血管を締め付けたら、体に悪そうだわ」と、いつもゆったりしたズボンをはいていた。

そのうち両ふくらはぎにボコボコが目立ち始めた。ある日、子の診察のついでに内科医に聞くと、「(ボコボコの部分を)切るしかないね」といわれた。

「冗談じゃない。働き手は私だけなのに、入院なんて無理」 医師の助言はとても、聞き入れられなかった。

40歳を過ぎたころ。足が熱を帯び、痛みやだるさで、工場を休むほどになった。病院を転々とするうち、隣の守谷市の病院の心臓血管外科で初めて「下肢静脈瘤(かしじょうみゃくりゅう)」という病名を聞いた。

足の静脈の弁が壊れたため、心臓に行くはずの血液が逆流し、こぶができてしまう病気だという。「万に一つだが、カチカチのこぶが肺や心臓にいつ詰まったら、命を落としますよ」。子どもを残して死ぬわけにいかない。医師の言葉に、ようやく手術を決意した。

夏休みに入院し、左右のもの静脈の一部を引き抜く「ストリッピング手術」を受けた。静脈の逆流がなくなり、症状は改善した。

夏休みに入院し、左右のもの静脈の一部を引き抜く「ストリッピング手術」を受けた。静脈の逆流がなくなり、症状は改善した。

これで心配なく働けると思った。だが、10年ほど経つと、再び足のだるさとむくみに襲われた。ひざから下は、蠟(ろう)を塗り込んだようにピカピカ。かゆくなると、血が出るまで爪でガリガリかかないと気がすまない。

病院に行っても不定愁訴の一種といわれ、治療につながるアドバイスは受けられなかった。足の不調に加え、不眠やめまいといった更年期障害のような症状が重なっていた。

工場長を任されて、365日気の抜けない日々が続く。「こんなつらい体のまま、いつまで働けばいいの」。八方ふさがりの気分だった。(熊井洋美)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright ©2012 The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.